

高校古典教育における主体的な態度を育む 授業開発研究

— 漢文教材を中心に —

学籍番号 219306

氏名 神山凌太

主指導教員 成實朋子先生

副指導教員 小路口真理美先生

1. 研究動機と目的

平成30年に告示された新学習指導要領が、今年度より、高等学校でも実施が始まった。中でも高等学校の国語科は大きな変更を余儀なくされ、新たな科目へと編成しなおされた。それでもなお、古典がこれからも高校国語の中心にあることに変わりはない。むしろ、新学習指導要領の中では、古典の学習を通じて、伝統的な言語文化に対する見識を深めるだけでなく、論理的に物事を考える力を養い、言葉を通して他者や社会に関わろうとする態度を育成することが求められているのである。しかし、これまで学習指導要領が改訂されても高校現場における国語の指導は変わってこなかったことがたびたび指摘されている。その理由として、学習者はもとより、教師が古典に苦手意識を持ってしまっていることが挙げられる。

本研究では、古典の中でもとりわけ漢文教材に焦点を当て、「主体的・対話的で深い学び」を実現するための授業開発を行うことを目的とした。

2. 基本学校実習Ⅱの概要

基本学校実習の概要について説明する。実習校は単位制普通科の高等学校であり、主に大学進学を目指す生徒がほとんどである。基本学校実習Ⅰで行った授業見学や実践授業の様子から、学びに積極的な学習者の態度をうかがい知ることができた。しかし、教材や文章に積極的に触れたり深めたりしようとする点においては不足が残った。

そこで、基本学校実習Ⅱでは、『老子』を扱い、その思想を理解したうえで現代の競争社会について書かれた文章を読み、その続きを書くという活動を行った。この活動を通じて、学習者それぞれがどのように老子の思想を捉え、考えたのかを交流し、より自分の考えを深めることができるようになることを目的とした。

実践授業の結果、設けた課題が学習者にとって刺激的であることは裏付けられた。しかし、一方で、課題に対する筆者の理解が不十分であったため、適切な助言ができなかったり、筆者の考えに学習者を導いてしまい、成果物に話し合い活動の結果が十分に反映されなかったりするという課題もあった。以上を踏まえて、発展課題実習では、改めて授業を構想し、実践を行うことにした。

3. 発展課題実習 I の概要

発展課題実習 I では、「江南橘為江北枳」（『説苑』）を扱った。この逸話は「晏子使楚」の一部であり、同様の逸話が『晏子春秋』にも見られるが、『説苑』とは採録の順に違いがある。筆者は、それぞれの説話の内容を理解したうえで、採録の順がなぜ違うのかを学習者に考えさせた。そうすることで作者である劉向の編纂意図に迫り、『説苑』のあとがきを書く、という活動を設定した。教材を作者という立場でとらえなおすことで、劉向の編纂意図について考え、教材についてより深く考えることができるようになることを目的とした。

実践授業の結果、学習者たちは教材を新たな視点から見つめなおし、話し合った意見を成果物に十分反映させることができていた。しかし、時間が不足したこともあって、『説苑』という書物について、劉向という人物について、そして「あとがき」というものについて等の情報をきちんと伝えることができなかつた。そのためか、「あとがき」というものの意味するところについて、十分に理解しないまま書く作業にはいつてしまった学習者も多くいた。

4. まとめ

本実践課題研究を通して、筆者は、学習者の主体性を育むことが実現されるような授業を開発し、行うことを目的としたが、授業実践を終えて感じたのはそのような授業を構想・実践することの困難さである。その意味では、本実践研究における目的はまだ十分に達成されなかつたと言わざるを得ない。ただしそのような中でも、筆者なりに手応えを感じる部分もあつた。それは、いずれの実践においても第3時において、発展的な課題を設定することにより、第1時、第2時での学習内容に学習者自らが主体的に能動的に立ち返り、自分が学んだものの内容について改めて見直していたということである。

その一方で課題も残つた。まずは授業を構想することにおいて非常に時間がかかり、いずれの実践においても、筆者だけでは考えることができず、かなりの部分を指導教員の先生方に頼らざるを得なかつたということは、筆者の今後の教員生活を考える上で、最も大きな課題である。また、授業実践を通して感じたこととして、学習者は話し合う活動は活発にできても、それをもとに書く活動になると、多くの学習者は「答え」を書こうとしてしまい、自由に書くことを恐れてしまうということがわかつた。学習者が書くことに戸惑いを感じているのであれば、授業者である筆者が書けるようにファシリテートする必要がある。ファシリテーターとしての己の授業者としての技術の不足は何より痛感するところである。

学習指導要領が改訂され、今までのような授業ばかりを行ってはいけなかつた今、もちろん筆者も含めて現場の教師は、常に学び続けていく姿勢を持ち続けなかつたといけなかつた。学習者が「主体的」に学ぶためには、授業者がまずその内容について理解を深めていなければならなかつたのである。漢文は決して距離の遠いテキストではないと捉えさせること、それこそが漢文の魅力を理解することにつながるのであらう。